

相双地区におけるホッキガイ漁獲状況及び資源状況

福島県水産資源研究所 資源増殖部

部門名 水産業－資源管理－ホッキガイ

担当者 岩崎高資

I 新技術の解説

1 要旨

ホッキガイは沿岸漁業の重要魚種であるが、震災後の操業規模の縮小により資源状況が不明となっていた。近年の相双地区におけるホッキガイの漁獲実態及び資源状況を明らかにし、資源管理方策検討のための基礎資料とするため、漁獲物調査や資源量調査を実施した。2022年漁期における漁獲物の殻長組成は90～95mmにモードを持つ単峰型を示し、2014年級が全体の61%を占めた。また、資源量調査の結果、2022年における資源状況は中位水準と推定された。以上の結果から、2014年級の加入が良好であったため、資源状況が好転した可能性が示唆された。

- (1) 2022年6～10月にかけて、相双地区沿岸域で採集されたホッキガイを用い、(国研)水産研究・教育機構と連携して年齢査定を実施し、殻長階級別年齢割合をもとめた(図1)。
- (2) 2022年6月～2023年1月に相馬原釜魚市場に水揚げされたホッキガイの殻長測定を実施し、調査重量をもとに鹿島地区の漁獲重量比で引き延ばし、2022年漁期の殻長別漁獲個体数を推定した。さらに、(1)でもとめた殻長階級別年齢割合を用い、殻長階級別年齢別漁獲個体数をもとめた(表1)。8歳(2014年級)が全体の61%を占め、漁獲主体であった。
- (3) 2021年～2022年度に、図2に示す保護水面及びその周辺海域36地点を、ホッキ貝桁網を用いて1地点あたり10m曳網した。調査地点は500m間隔で設置しており、各地点の採捕重量×(500m×500m/10㎡)で各区画の資源量をもとめ、それらを足し合わせて漁場全体の資源量とした(図3)。2022年における資源量は8,011トンで中位水準と判断した。
- (4) 資源量は2010年には過去最低となったが、調査を再開した2021年度以降、資源は回復しているものと考えられた。年齢別漁獲個体数割合は2014年級が主体であったため、資源の回復要因として2014年級の加入が良好であったことによる可能性が示唆された。

2 期待される効果

- (1) ホッキガイ貝桁網漁業操業拡大のための基礎的知見となる。

3 適用範囲

- (1) 漁業関係者、研究者

4 普及上の留意点

- (1) 資源量調査に用いた漁具の変更に伴う採集効率の差異に留意する必要がある。

II 具体的データ等

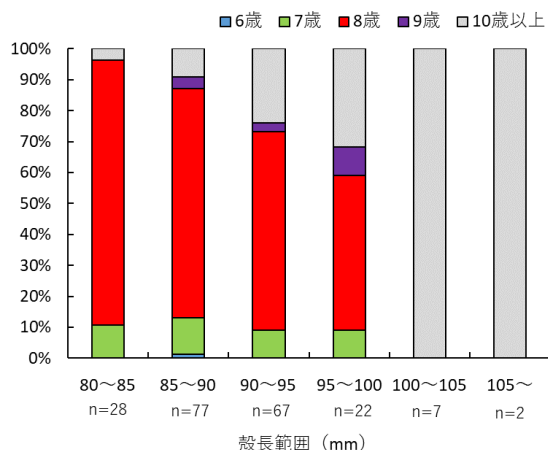


表1 殻長階級別年齢別漁獲個体数 (2022年漁期・鹿島地区)

年 齢 (年 級) 殻 長 (mm)	単 位 : 個				
	6 歳 (2016年級)	7 歳 (2015年級)	8 歳 (2014年級)	9 歳 (2013年級)	10歳以上 (2012年級以前)
80~85	0	479	3,835	0	160
85~90	506	4,553	28,836	1,518	3,541
90~95	0	4,657	33,374	1,552	12,418
95~100	0	2,115	11,634	2,115	7,404
100~105	0	0	0	0	7,056
105~	0	0	0	0	2,346
合計 (個)	506	11,805	77,679	5,185	32,925
割合 (%)	0	9	61	4	26

図1 殻長階級別年齢割合 (2022年調査)

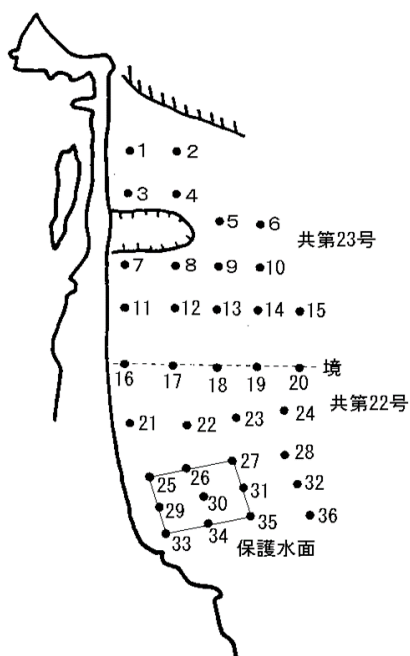


図2 ホッキガイ資源量調査地点図

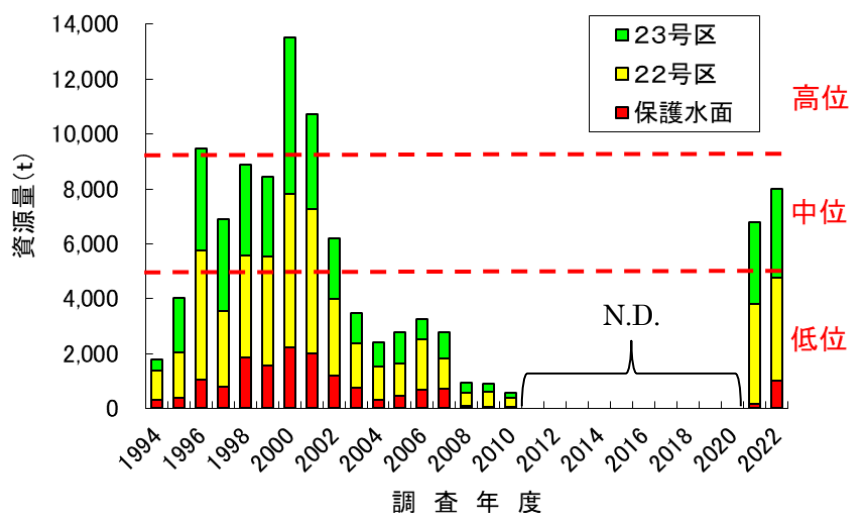


図3 ホッキガイ資源量の推移

資源水準の判断基準：1994～2010年、2021～2022年の資源量の最大値と最小値を三等分して高中低境界を算出
 高中境界=9,197トン、中低位境界=4,879トン

III その他

1 執筆者

岩崎高資

2 成果を得た課題名

(1) 研究期間 令和3～7年度

(2) 研究課題名 沿岸性底魚類の生態と資源動向の解明 (ホッキガイ)

3 主な参考文献・資料

(1) 福島県水産試験場 平成22年度事業概要報告書 p76～77